

『ウィルソンの旦那、あつしも髪が赤かったらなあ。』って、そこでわしは聞き返しましたよ。

『そいつはどうして?』って。

するとあれは言うんです。『なせって、ここに赤毛連盟の欠員があるんですよ。ここに入ればどんなやつでもちよつとした金持ちになれるんですよ。何でも、連盟の欠員を埋める人間が足りないうらしくて、遺産管財人が宙に浮いた金をどうしていいか途方に暮れているらしいそうですぜ。あつしの髪の色が変えられたら、連盟に入って金をくすねてやったのに。』

だからわしは、『何、そいつあ一体何の話だ?』と聞いてやりましたよ。ほら、ホームズさん。わしは職業柄、出不精なんですよ。こつちから行くんじゃないかと、向こうから来てくれますからね。だから何週もドアマットをまたがないうこともめずらしくないんで。……そんなわけで、世間のことにははてんで疎いもんで、ちよつとしたニュースでも聞くと、気になってしまつて。

するとあれはね、『赤毛連盟のことをご存じないんですか?』と、眼を丸くしやがるんですよ。

『ないなあ。』とわしが答えると、

『ふうん、そいつは不思議だ。旦那は空席にびつたりの資格を持つているっていうのに。』

『それは、どんないいことなんだい?』とわしは詳細を聞こうとしたんですわ。

『まあ、たった一年に二百ポンドってところですが、仕事はわずかなもんですから、他の仕事の妨げにはなりませんぜ。』

ってな訳でしてね、わしが耳寄りな話だと思つたのも無理ないことでしょう。ここ数年は商売がうまくいってなかつたもので、一年に二百ものあぶく銭がありやあ、とてもありがたいですから。

『詳しく聞かせてくれないか?』とわしはどうとう本腰になつてきました。

『ええ。』と、あれはそう言つて、あの広告をわしに見せるんです。『旦那、ほらここに空席があるでしょう、問い合わせ先だつて載つてますぜ。なんでも、その連盟つてのは百万長者の米国人、イズイーキア・ホプキンズつていう変人が設立したらしくて、そいつ自身が赤毛だったもんだから、同じ赤毛の人間に大きく共感

するらしいんです。てなもんで、死んだときに莫大な遺産を管財人に預けて、その利子を使って、自分と同じ色の髪を持つ男が楽に暮らせるように金を分配してくれ、と死に遺したらしいんです。話によると、給料の気前はいくせして、することはほとんどないときたもんだ。』

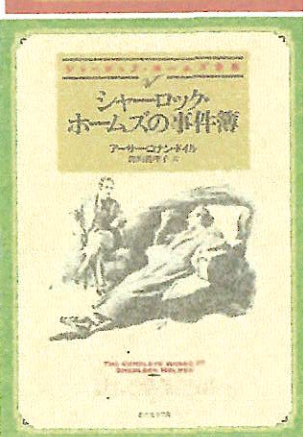
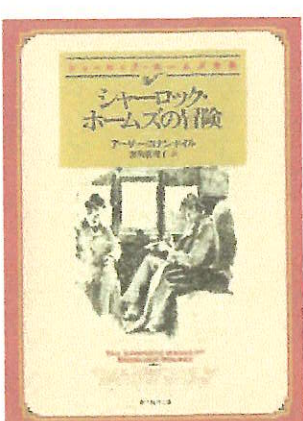
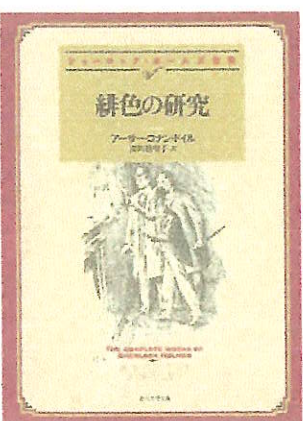
○『赤毛連盟』とは一体何なんでしょうか。このあとホームズの名推理が冴えわたります!

続きが気になった人はぜひ読んでみてください。長さもちょうどいいですよ。

アーサー・コナン・ドイル



(1859-1930)アイルランド人の役人の子として、スコットランドのエディンバラに生れる。エディンバラ大学の医学部を卒業し、ロンドンで開業するが、家計の足しにするために文筆に手を染める。『緋色の研究』(1887)を皮切りに次々と発表された私立探偵シャーロック・ホームズと友人ワトスン博士を主人公とする一連の作品は世界的大人気を博し、「シャーロックキアン」と呼ばれる熱狂的ファンが今なお跡を絶たない。(新潮社HPより)



○今回はアーサー・コナン・ドイルの『赤毛連盟』を紹介します。ロンドンの名探偵ホームズと助手のワトソンの元に、ある日男が不思議な相談にやってきた。

「これです。これが事の始まりだったのです。自分自身でご覧になって下さい、ホームズさん。」

私(ワトソン)は新聞を受け取り、次のように読み上げた。

赤毛連盟に告ぐ——米國ペンシルヴァニア州レバノンの故イズイキア・ホプキンス氏の遺志に基づき、今、ただ名目上の尽力をするだけで週四ポンド支給される権利を持つ連盟員に、欠員が生じたことを通知する。赤髪にして心身ともに健全な二十歳以上の男性は誰でも資格あり。月曜日、十一時、フリート街、ポープス・コート七番地、当連盟事務所内のダンカン・ロスに直接申し込まれたし。

私は、この奇怪極まる広告を二度読み返した。

「……意味がさっぱりわからん！」口をついて出たのは、こんな叫びだった。

ホームズはくすくすと低い声で笑い、椅子に座ったまま身体を揺すった。これはホームズが上機嫌のときの癖である。「これはこれは、少々常軌を逸した話だ。ほう。」とホームズは呟く。「ではウィルソンさん、早速取りかかりましょうか。あなたと家族のこと、そして広告に従った結果、生活にどんな影響があったのかを教えてください。博士、君は新聞の名前や日付を書き留めてくれないか。」

「一八九〇年四月二十七日、モーニング・クロニクル紙。ちょうど二ヶ月前だ。」

「うむ、結構。ではウィルソンさん、どうぞ。」

「ええと、それは先ほどシャーロック・ホームズさんに申し上げたとおりで……」ジエイベス・ウィルソンは額の汗を拭い、話を続けた。「わしは中心区あたりのコバーク・スクエアで小さな質屋業を営んでおります。と言っても、手広くやっているわけでもなく、近頃はともさっぱりで、一人でようやく暮らしていけるという有様ですわ。昔は店員を二人雇うことが出来たんですが、今は一人しかございません。本来なら払うのも難しいところな

んですが、本人が見習いでいいからと他の半分の給料で来てくれとるんです。」

「その見上げた青年の名前は？」シャーロック・ホームズは尋ねた。

「名を、ヴィンセント・スポールディングと言っていますが、青年というほどじゃありません。あれは年の見当がつかんのです。だが、店員としてはとても利口なやつでさあ、ホームズさん。他で働きゃあ今の倍は稼げる腕があると、わしや踏んどるんです。まあ、あれが満足してるんだから、入れ知恵する必要もありませんまい。」

「確かに、その通りです。あなたも運のいい方です。」

相場以下で従業員を雇えるとは。今のご時世、なかなかそううまくはいかないものです。変わりものという点では、その従業員と広告、甲乙付けがたいと言えます。」

「いや、実は、あれには欠点もありまして……」ウィルソン氏は苦い顔をした。「あれほど写真の世界につきりきった男はそこいらにおりますかな？ あれは見習い修業もせならんのに、カメラを持ち出して、ばちばちとやっては、ウサギが穴にはいるように地下室へ潜り込んで、写真を現像しよるんです。それがあれの粗なのですが、大まかに見りゃあ、いい仕事をしとります。悪いやつでもありません。」

「察するに、彼はまだ店にいると？」

「ええ、そうですとも。あれと十四になる娘っ子がおります。これが簡単なまかないと掃除をしてくれとるんですわ。わしの家はこれだけです。わしは男やもめでして、家族もありません。わしらは三人でひっそりと暮らしているんですよ。たいしたこたあできませんがね、一つ屋根の下で夜露をしのぎ、借りた金を返すくらいのことしております。」

そこへこの広告ですよ。この広告が面倒の始まりだったんです。あ。スポールディング、あれがちょうど八週間前、まさにこの新聞を手持って、二階から降りてきて言うんですよ、

